

# 注連繩にみる伝承形態の調査研究(Ⅲ)

—中国地方・2—

## A Study of Traditional Form “Shimenawa” (Ⅲ)

—in chugoku Area . 2—

佐藤 武郎 河野 公記 陶山 昌生

### まえがき

前回は中国地方の1として、山陰地方3県について調査結果を報告した。引続き今回は山陽地方、広島県、岡山県、兵庫県についてまとめたものである。

瀬戸内海に面した山陽地方は、無数の小島と岡山平野、姫路平野があり、商工業都市が帯状に続いている。また米作も盛んで注連繩を「飾る」という風習も山陰地方と比較するといまなお盛んであった。

さて、今回の調査となる広島県、岡山県、兵庫県についての概要を述べてみると、広島県は「輪ジメ」「牛蒡ジメ」であり、輪ジメが主流をなす。岡山県では「輪ジメ」で統一される。兵庫県では「牛蒡ジメ」で統一され、県北と県南では多少変化をみる。本文ではその詳細を提示するが、前回で述べたように、兵庫県を除き、基本的形態としては「輪ジメ」が主流をなしていた。

### I 研究目的

正月の「シメ飾り」=注連繩をデザインの見地より調査分析し、注連繩のもつ造形的様相美の再見を目的とする。

### II 調査研究の手続

1. 中国地方（広島県、岡山県、兵庫県）において一般家庭で飾る注連繩。

### 2. 調査期間

1978年（12月26日より同年12月31日まで）

1979年（12月26日より同年12月31日まで）

### 3. 収集の手続

中国地方各県に出向して調査収集を行った。

### 4. 写真による形態の記録。

5. 注連繩の付属物（飾り）を除去した基本体（礎形）の構造分析。

### III 考察と結果

地域別に考察をすすめるが、挿図※印は各地域の代表的（主流をなす）形態とみてよい。本研究で使用する形態用語は、民族学で用いられているところの四つの分類、つまり、牛蒡ジメ、板ジメ、輪ジメ、一文字ジメの四種に因って考察した。Fig1は県別注連繩の形態分布図である。

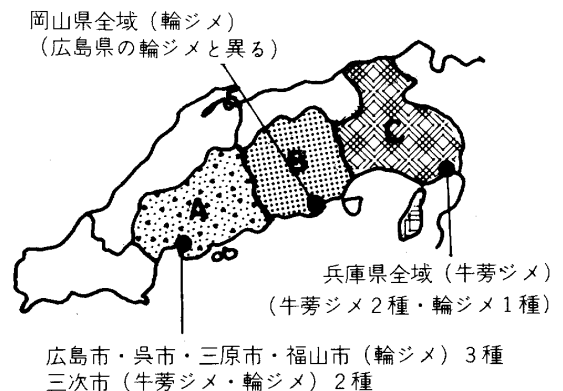
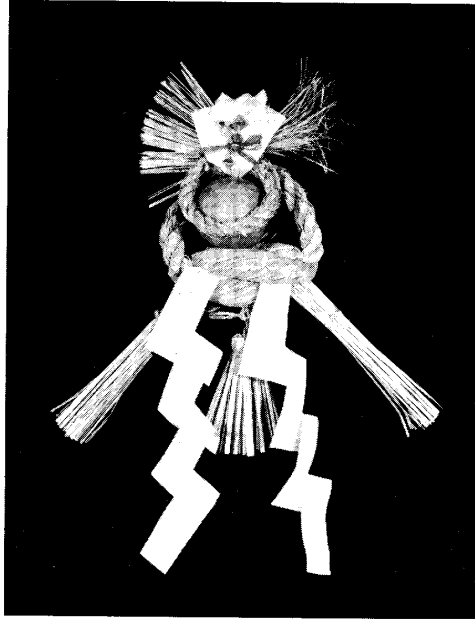


Fig I 中国地方II注連繩の形態分布図



広島県※Fig2-a

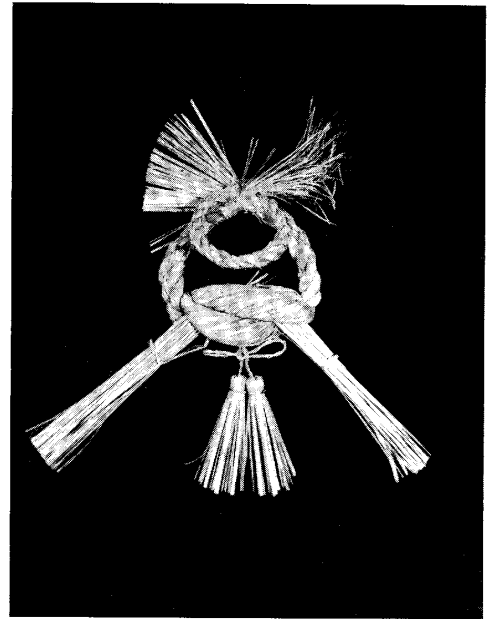


Fig2-b

### 1. 広島県 Fig1-A (牛蒡ジメ・輪ジメ)

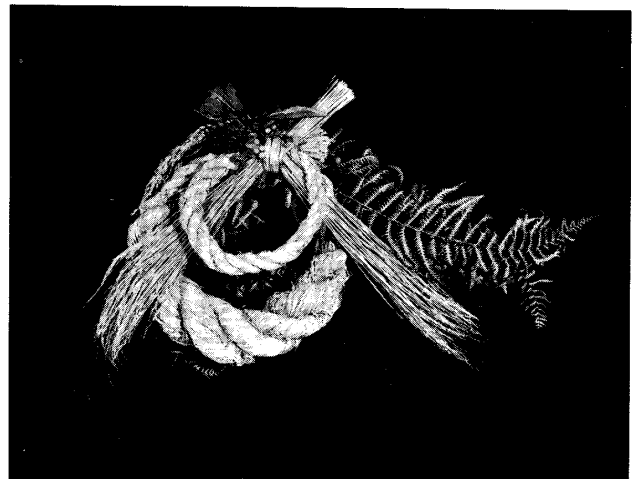
広島県の主流をなす形態は輪ジメである。以下挿図でみられるように、九州地方<sup>1</sup>、四国地方<sup>2</sup>でみた輪ジメと比較すると非常に異った形態である。特にシデの用い方に特徴がある。

Fig2-a は代表的な注連縄である。広島市、呉市、尾道市および瀬戸内海の島々でもこの形態である。前回の巻末で述べたように、例えば生口島瀬戸田町は愛媛県の大三島と非常に接近した位置にあるが、注連縄の形態は明らかに異種の形態である。

Fig2-a は長さが35cmで図のように最上部に水引をかけた熨斗が飾られ、二重輪にすっぽりとだいたいを付ける。さらに外輪の最も太い部分に御幣を左右にさげる。Fig2-b で明らかなようにシデが束ねて用いられている。Fig3-a は広島県安芸津町で収集した注連縄である。この輪ジメも二重輪であるがシデの位置が最上部で交叉している。しかし Fig2-b と Fig3-b を対照してみると基本的な形態は同種であるとみてよい。但し飾りは Fig3-a の場合果実のついた南天と裏白であった。

県北三次市の輪ジメでは、前掲の飾りの他、「家内安全」「幸福」と書いた短冊をつけていた。

Fig4-a は三次市の牛蒡ジメである。綯い尻に稲穂を取り付けた形態はめずらしい。さらに挿図のように上部には長命延寿の短冊を付けた矢を飾って



広島県Fig3-a

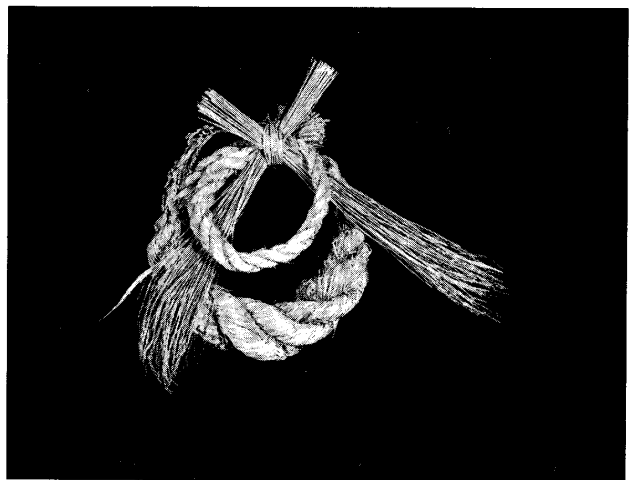
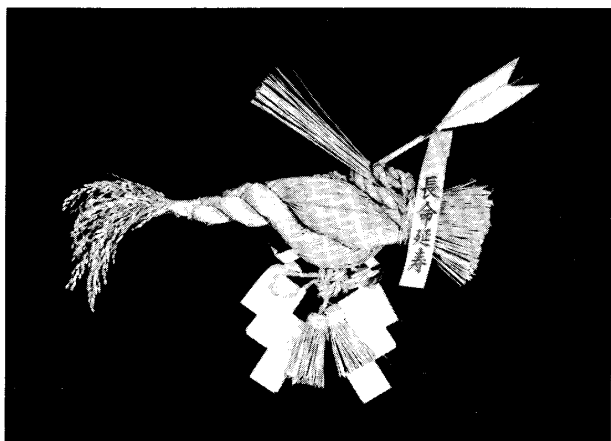


Fig3-b



広島県Fig4-a

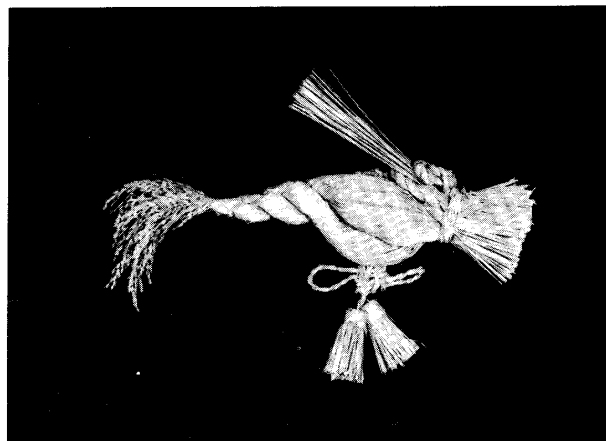
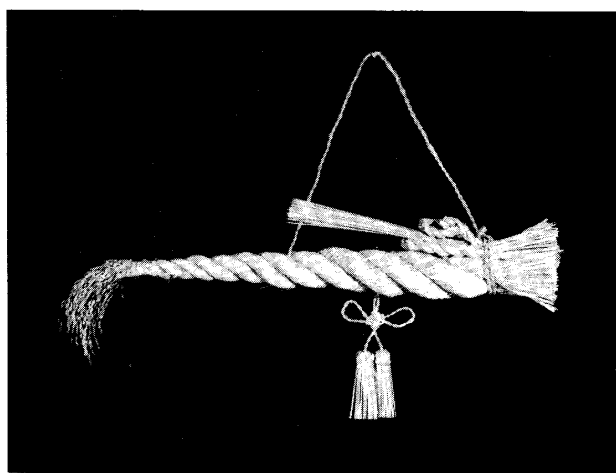
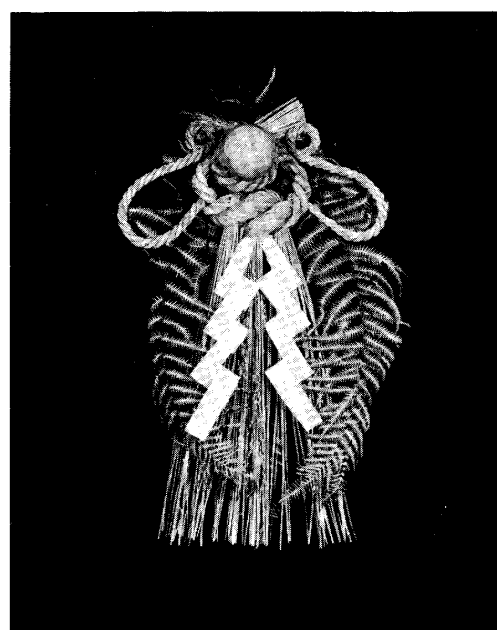


Fig4-b



広島県Fig5



広島県Fig6-a

る。Fig4-a, Fig5 でみられるように、いずれも右上部に小さな輪ジメを付加しているが意味は不明である。九州地方、四国地方でみた牛蒡ジメの形態ではみられなかったフォルムである。サイズは Fig4 は 48cm Fig5 は 60cm である。Fig4 の最も太いシメの部分は 12cm もあった。

Fig6-a は尾道市向島町で収集した注連繩である。長さが 58cm もあり、二重輪ジメであるが図のように別の繩が左右に付加されて、広島県の主流をなす形態と異なる。シデも異常に長く、三条に分けられてさげる。飾りは裏白、だいだい、御幣である。ここでは別に牛蒡ジメの注連繩も収集した。これは神戸市の注連繩と同種である。広島県の注連繩にはすべて御幣を付加していた。また、広島市内の注連繩では、二重輪ジメと三重輪ジメがみられた。

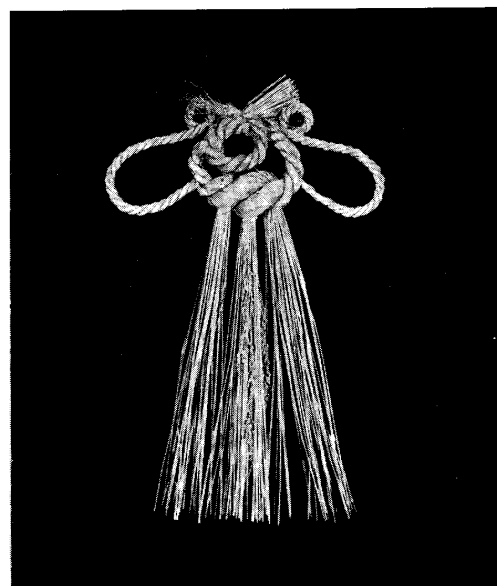
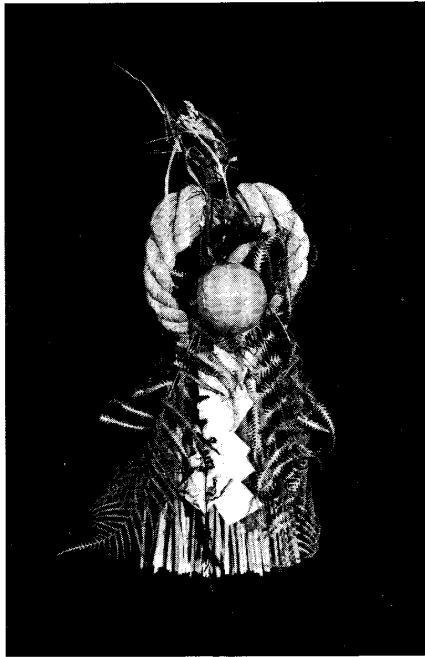


Fig6-b



岡山県Fig7-a



※Fig7-b

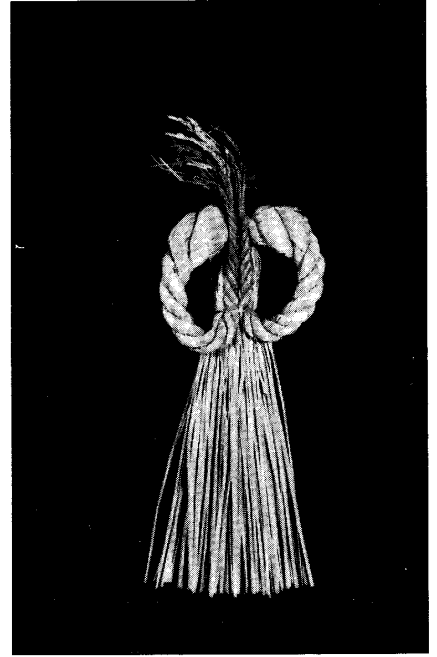
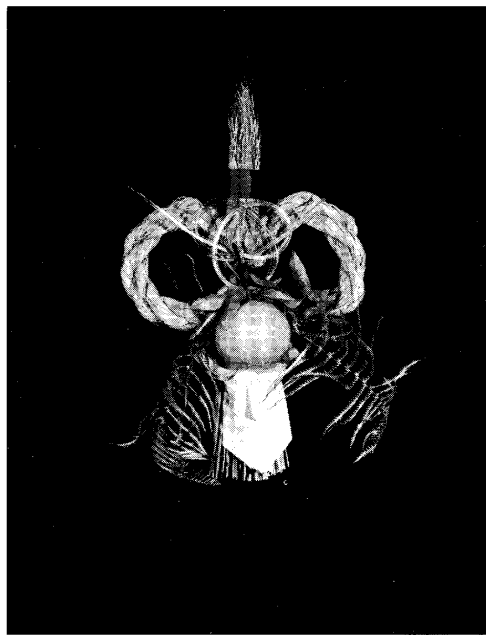


Fig7-c



兵庫県Fig8-a

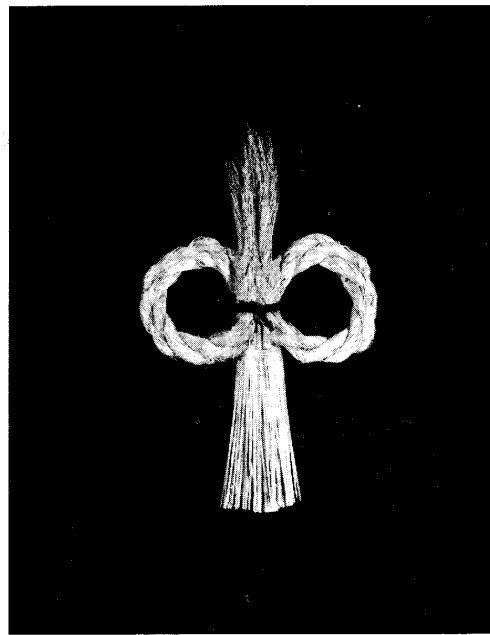


Fig8-b

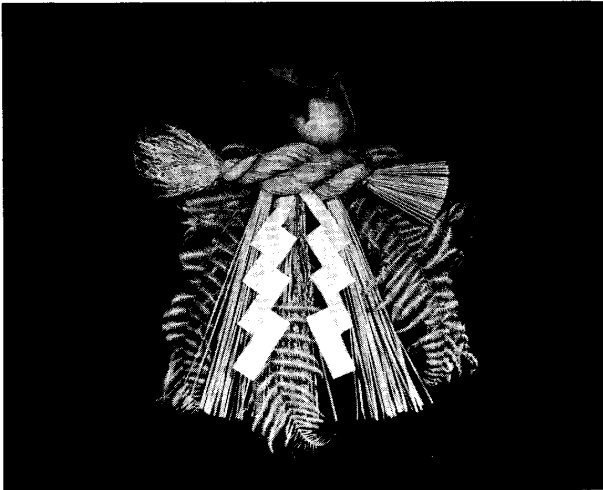
## 2. 岡山県 Fig1-B (輪ジメ)

Fig7-a, bのように岡山県は輪ジメで統一されている。Fig7-aは岡山市, Fig7-bは県北の津山市の注縄縄である。

この注道縄の形態の特徴は Fig7-c でみられるように、縦位置 (48cm) で構成した輪ジメである。

形態に特殊な要素がみられるので、その構造を少々分析してみよう。この注連縄の場合、牛蒡ジメ

の基本形を縦位置で扱い、藁束の中央部を結えて、それより下方を縋わずに長く切りそろえてシデとする。一方、中央部の結び目より上部を2つに分けて、左右対称にそれぞれ縋い上げていくと漸次細くなる。これを両わきから Fig7-c のように中央部で輪になるようにして、縋尻の止めの部分を重ねて、輪の最上部に取りつけたものである。したがって、Fig7は広島県や他の地方の輪ジメと異り、輪ジメの



兵庫県※Fig9-a

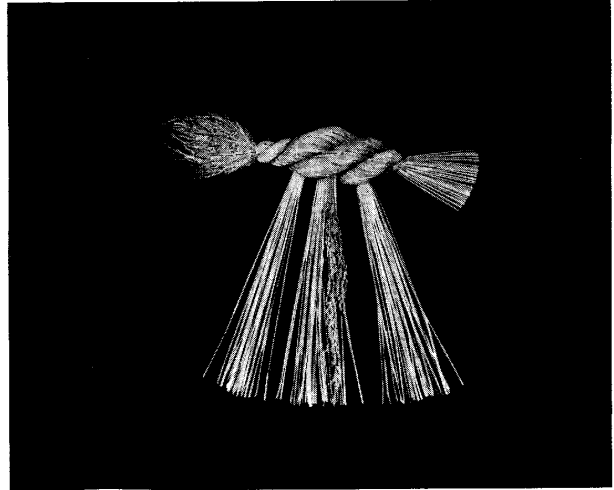
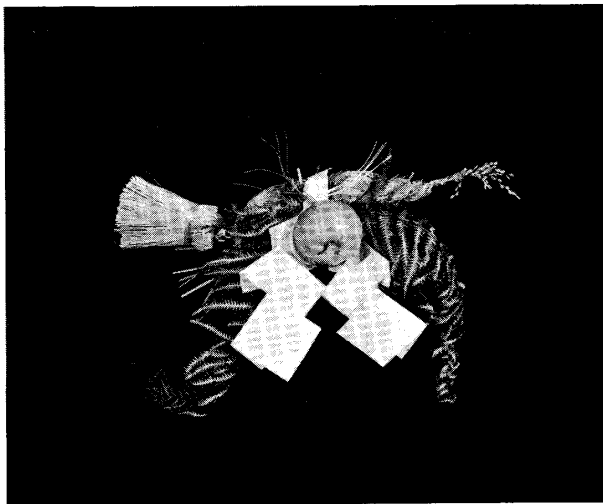


Fig9-b



兵庫県Fig10-a

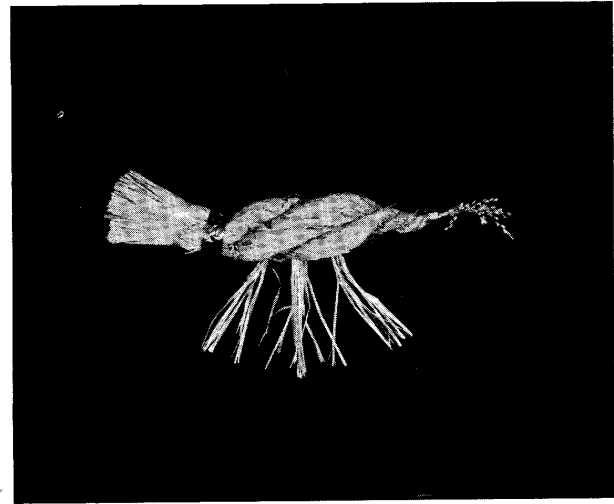
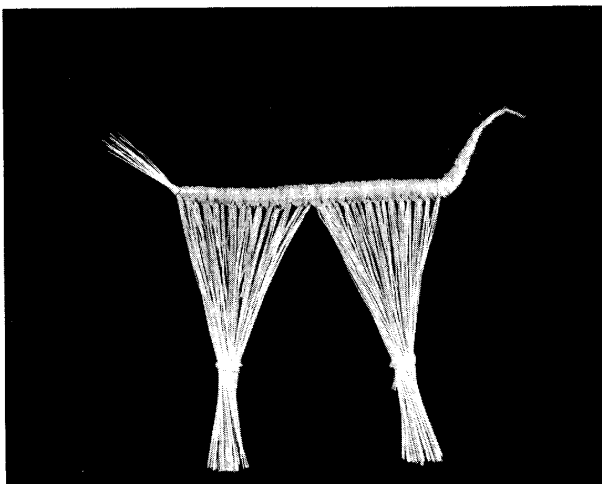


Fig10-b



兵庫県Fig11

最も太い部分が輪の上部に位置する。つまり、輪ジメの重心が逆転した形態となっている。しかし、シデにポリウムがあるため、注連繩の全体的フォルムはバランスのとれた形態となっている。いま一つには絢尻の先端に稲穂がついていることである。つまり、この注連繩は、稲を刈り獲ったところの全長(穂長、稈長=第1節間、第2節間、第4節間)を非常に合理的に使用した造形物であるといえよう。

Fig7-aの飾りは造花の松竹梅である。また、稲穂を束にした部分は水引で結える。Fig7-bでは輪ジメの中央下部にだいだいを飾り、裏白、御幣2条中央下部に下げる。

以上のように岡山県では異種の注連繩がみとめられなかった。(わずかに後述の赤穂市と同種の注連繩ひなせを日生町でみた。)

### 3. 兵庫県 Fig1—C (牛蒡ジメ) (輪ジメ)

Fig8—a は兵庫県赤穂市上仮屋で収集したものであるが、この注連縄の形態は以前各地<sup>3</sup>でしばしばみかけた。

この注連縄は他県の同種のものよりシメが図のように立派である。製造途中のものも見学できたが、作者いわく、赤穂城趾周辺の町で使用するといふ、大量生産ではない。シメの縦は42cm、巾28cmである。飾りは、Fig8—aのように金、銀糸の水引、讓葉、だいたい、裏白であり、中央下部のシデに平行して熨斗（白紙）を飾る。岡山県日生町でみかけた注連縄と同種であるが、赤穂では前掲のごとく制作現場をみたので Fig8 を優先的にとりあげた。Fig8—a で明瞭なようにシメの穂先には稲の実が取り除かれて、束にした部分は紫紺の紙テープでしっかりと整形されている。

Fig9—a は兵庫県の主流をなす注連縄の形態である。牛蒡ジメであり、シデを3条にまとめて下げる。シデの中央部には、実物の稲穂が付加されている。神戸市では飾りはだいたい、裏白の二種を用いて、注連縄の形態的印象は大分県とよく似ている<sup>4</sup>。

三木市では基本的形態に変化をみないが、中央部のシデ（稲穂）を熨斗で包む。絢尻は左向で終る。

Fig10—a は兵庫県北部、豊岡市で収集した牛蒡ジメ。シデを3条さげるが、神戸市のシデと比較すると豊岡市のシデは分量が Fig10—b のようにきわめて小量である。飾りはだいたい、御幣、裏白である。Fig9—b と Fig10 の基本形を対照してみると、絢尻の方向が左右逆であり、兵庫県の主流をなす形態は Fig9—a であった。また、赤穂市と同様の輪ジメ1種を収集した。

Fig11 は同県北部香住町の注連縄である。特殊な形態であるため、はっきりした分類は控えたいが、フォームを別にしてもシメが平面的で板ジメに近い。

淡路島は瀬戸内海最大の島であり、神話の島でもある。1978年12月に調査した時点では本学紀要第16巻<sup>5</sup>で提示したものと同様の形態をしめす牛蒡ジメである。

#### ま と め

全国的に普及したテレビジョンにより、我々はそ

の日の出来事を各地で知ることができるが、注連縄の伝承形態は本稿で掲示したように、それぞれの県単位で変化した様相をみることができる。広島県と岡山県は共に輪ジメの様式であるが、確実にその形態には相違したものをみた。つまり、隣接する地域であれば文化の交流が容易におこなわれるものと推察するのが常識である。したがって先に述べたように、注連縄の形態にもかなりの交流をみるものと予想したにもかゝらず各県別に異種の形態をみることができた。

今回をもって近畿地方より西側の中国、四国、九州の主流となる注連縄の形態調査を完了したことになるが、この調査結果をみると、17県のそれぞれに異種の形態を伝承している。いかなる人々がいかなる時代に、これらのデザインを考案したものであろうか？。この問題を解明しようとしたわけではないが、これまでに収集した注連縄をみるとそのいずれの形態にも独特の創意工夫 (design) がみられ、これらの「伝承」は日本人の精神的な表徴の一形式としてみたい。

将来：全国的な調査結果が終了した時点において、その形態の様相美を再見してゆきながら、形態分析の総括としてデザイン資料の一端としたい。

次回は大和、南紀地方の注連縄について発表する予定である。尚、今回も注連縄収集期間中、本学付属高等学校美術教諭、陶山昌生氏が加わったことを記す。

#### および参考文献

1. 「注連縄にみる伝承形態の調査・研究」I 九州地方、佐藤武郎・河野公記大分県立芸術短期大学紀要 第15巻。
2. 同上第16巻。
3. 同上第15巻 P.18 Fig26 同上第17巻 P.26Fig5, P31 Fig18。
4. 同上第16巻 P. 20 Fig33。
5. 同上第16巻 P.18Fig 3 参照

#### 参 考 文 献

1. 日本の美「やしろ」 学習研究社1979。
2. 北国のわら細工 紺谷憲夫著 北海道出版企画センター1976。